

社会的意味の計量分析：新自由主義とは何か

首都大学東京 左古輝人

目的

本報告の目的は「新自由主義」という語句が近代日本の公的言論のなかで何を指して用いられてきたかを明らかにすることである。特に、「新自由主義」が21世紀初頭の一過性の流行語にすぎないのか、それとも何らかの程度において歴史の風雪に耐えるキーワードとなりうるのかに留意して考察する。

方法

日本語定期刊行物記事（約2500件）および図書（約150件）の題目および目次のテキストマイニングをおこなう。比較のために英語定期刊行物記事（約5000件）および図書（650件）も同様に分析する。出典はNDLOPAC、Webcat Plus、およびBritish Library Catalogueである。テキストマイニングとは、自然文に出現する語句群の出現頻度と共起頻度を計測することによって有意な知見を得ようとする研究諸技法の総称である。

結果

大別して2つのことが判明した。

- 1) 英語における「neoliberal」が南アメリカ諸国のリアルタイムの政治経済情勢との関連で言及されやすいのに対して、日本語における「新自由主義」は日本国内の行政の現状および歴史との関連で言及されやすい。
- 2) 1980年代半ばまでをみると、日本語における「新自由主義」の出現は英語におけるよりも顕著に多い。

結論

第1の知見は、英語における「neoliberal」が冷戦終結後のグローバルガバナンスとの関連で把握されているのに対して、日本語における「新自由主義」が小泉政権以降さかんに参照された、80年代英米の新保守主義政策との関連で把握されていることを示している。

第2の知見は、20世紀前半、上田貞次郎、鶴見祐輔らが、ファシズムと Kommunismus の両集産主義とレッセフェールに対して、後発国日本が採りうる「中道」としての「新自由主義」を自認したのに対して、英語における「neoliberal」が一貫して、何者かに対して他者から貼られるレッテルであったことを示している。

「社会」や「ジェンダー」など長命なキーワードには、普及の過程で当初とは正反対の指示対象をも包摂してゆく傾向、対立する多様な思考が交流する言論アリーナそのものと化してゆく傾向がある。

「新自由主義」もそのようなものになる徴候が見える。20世紀前半日本の「新自由主義」と、戦後英米でハイエクやフリードマンに対して貼られたレッテルとしての「新自由主義」はいくつかの意味でまさに「正反対」である。また2000年代における「新自由主義」言論のインフレーションに多大な貢献をなしたハーヴェイが鄧小平＝習近平の改革開放路線をも「新自由主義」に含めたことは時に非難されるが、本稿の観点からすれば積極的な評価に値するのではない。

なお、今後考察を進めるには、英語における自称「liberal」の諸用例も分析する必要がある。